「変」とは何か

── カオス，コスモス，境界線の視点から ──

斗　鬼　正　一*

はじめに

通勤電車の中での化粧，飲食への風当たりが強い。抜け毛を散らかすなどすればともかく，多くは周囲に特別迷惑をかけているというわけではない。それでも違和感がある，マナーに反する，恥ずかしい，と白眼視される。

もし通勤電車に水着姿の人が乗っていたら，違和感どころではなく，ものすごく「変」となる。その水着姿は，電車内でなく，プールサイドなら何も変ではないが，逆にプールサイドにスーツ姿のサラリーマンがいて，酒を飲みながらパソコンで仕事していたらものすごく変だ。

物でも，道路上に本が置いてあったら変だし，家の中に自転車が置いてあるのも変。建物外壁2階の階段もないところにドアがあるのも変だが，山がないのにトンネルだけあるなどというのはもっとずっと変だ。

こうしたことが変なのは，あまりにも当たり前のことで，なぜ変なのか，などということは，誰も考えてもみない。

まして，深夜に，大学の教室で，水着姿の幼稚園児が，ゲートボールをしていたら，なぜ変なのか？　商店街で，上半身裸のおじいさんが，地べたに座って，おままごとをしていたらなぜ変なのか？　などというのは，考えても全然わからないし，そもそもそんなことを考えることに意味があるとも思えないだろう。

2008年11月28日受付
* 江戸川大学　ライフデザイン学科教授　都市人類学

文化人類学は人間とその文化，社会，生活というものの仕組みを理解しようとする学問である。しかし社会の理解などといったところで，社会というもの自体が存在し，目に見えるわけではない。目に見えるのは，日常生活で実際に起こることであり，たとえば，電車の中で座席がどう埋まるのか，誰かと誰かが喧嘩して，誰がどう仲裁して，といったことである。そしてこうした日常の，身の回りの小さなことからこそ，人間とその文化，社会の仕組みが見えてくるのである。

そうした人間の文化，社会，生活は，多くの当たり前が定められ，その当たり前が当たり前であることによって動いている。したがって，人間とその文化，社会，生活というものがどんな仕組みで動いているのかを理解しようとするならば，その当たり前の裏側を見なければならない。すなわち，当たり前が当たり前でなくなる，当たり前が毀損される時を考えねばならないというわけである。

それゆえ本稿では，人間とその文化，社会，生活の理解をめざして，当たり前が当たり前でなくなる状態，つまり「変」という切り口から迫っていこうというわけである。

第一章　時間と変

Ⅰ．時間的境界と変

1. 暦と変

たとえば3月9日の夕食がお節料理，9月2日の朝にお屠蘇を飲んだ，などという家庭はまずない。仮にいるとすれば，変な人，変な家族と，白

い目で見られ，変わり者というレッテルを貼られてしまう。食べたければ食べてもよさそうなものだし，禁止されているわけでもなければ，誰の迷惑にもならない。実際売っていないということもあるものの，そもそも誰も買って食べようとなどしない。

現在は年中売られているが，かつては餅も，正月か祭りでもなければ食べなかった。そして祭りでもないのに杵の音をさせるものではない，正月でもないのに餅を食べるものではない，などといわれ，病人が餅を食べたいと言い出したら，隣近所に断って理由を話してから，などという地方があったほどであった。

また自分が寒いと感じたとしても，夏にコートを着たり，暑いと感じたから冬に半そでを着たり，などというのも変とされてしまう。

2. 昼夜と変

昼間寝ていて夜起きている，夜に掃除や洗濯をする，といった昼夜逆転の生活，いつも何かしら食べている食生活，昼間なのにパジャマ姿でごろごろ，といった生活は，いわゆるだらし無い，変な生活と，世間から白い目で見られる生活である。

要するに，暦，日付，昼夜といった時間の境界線を曖昧にしてしまう行動が変とされている，というわけである。

Ⅱ．境界的時間の魔性とタブー

1. 時の分類

出かける前に針仕事をすることを「出針」と呼び，縁起が悪いとされる地方があるが，針に関しては他にも，服を着せたまま針を刺してはいけないという地方もある。また食事の後すぐ寝ると牛になる，というのは広く言われている。

出かける時と家にいる時，服を着た時と服を縫う時，食事の時とそれ以外の時，といった日常生活の時間分類の境界線が，タブーの付与された時間とされるのである。

2. 昼夜逆転

鶏が夜鳴くと災いがある，夜に髪をとくのは縁起が悪いという地方もあるが，夜爪に関してはさらに，単に切ってはいけないというのに加えて，親の死に目に会えない，火事になる，狐に化かされる，病人が出る，犬の爪になる，など地方によってさまざまに言われてきた。暗いので怪我や深爪の危険性がある，夜爪が世詰め，余詰めに通じ早死にする，親の死に目に会えない，夜は陰気がこもり幽鬼が出没する時間であり，夜爪を切ると幽鬼を刺激して災いをもたらす，などとも言われる。

靴下を履いて寝ると親の死に目にあえない，という例は，かつて死者には足袋を履かせて入棺したため，縁起が悪いとされるからだといわれている。

しかしこれらは，髪をとかす，爪を切る，靴下を履く，あるいは鶏が鳴くという，通常は昼間にすること，起こることを，夜にする，あるいは起こる，という例であり，昼夜の境界線を無化してしまう場合にタブーとされていると考えることができる。

3. 昼夜の境界線・逢魔が時

昼夜の境界線上にある夕方は，新しい着物や靴を下ろしてはいけない，などのタブーがあるが，土佐地方では，黄昏時に，外の光と灯の光との二つのあかりがあるのをフタアカリといい，フタアカリで衣を裁つことを忌んだ。これについて柳田国男は，「死者の着物は時を構はず，斯ふいふあかりの下でも縫ふからであらうが，一般には，この二あかりの時刻を深夜よりも警戒するのが，未知の世界に対する古風な感じで，その故に黄昏を悪い時刻と謂って居るのである」と述べている。

黄昏時はさらに，大魔時（おおまがとき），逢魔時などと呼ばれ，不気味な時間帯とされてきた。黄昏時の村の辻は，辻占も行われるが，辻斬り，妖怪が出現する魔所だったし，かつて親たちは，夕暮れ時に子どもが外で遊ぶことを大変心配した。兵庫県では「日暮れどきには魔が通る」から早く家に帰れと言ったし，子供達も，日暮れ時にはヒトサライに対する恐怖感をもっていたという。信州でも，夕方にはフクロカツギという大きな袋を持って歩く化物が子どもをつかまえにくるという。夕方になるとコ

トリ（人さらい）が出て捕まってサーカスに売られてしまうから早めに家に帰るようになどと言われていた（吉田，1976）。

夜と昼の境界線である宵と暁の薄明りのころもまた，井上靖が『幼き日のこと』の中で，まだ夜が明けきらない暁闇の時刻には「前生の暗さのようなものが，あたりには生臭く漂っている」（井上，1974）と述べているように，不気味な時間とされていた。たとえば柳田は，幽霊が出るのは丑三つ時だが，お化けが出現するのに都合の良い時間は宵と暁の薄明りのころであろうという（柳田，1977）。たしかに幽霊・妖怪が白昼に出るとしても，その場合は，必ず周囲がうす暗い薄明と化す。

夕暮れ時を魔性と結びつけるのは日本に限った現象ではなく，多くの伝統的な社会で広く見られる。

バリ島では夕方のことをチャンディーカラといい，非常に危険な悪霊という意味である。すなわち夕方は，カラという悪霊が地上をさまよい歩く危険な時で，人を呪うための呪力も強力になるといわれている。人びとは悪霊が災いを与えぬように供物を与え，外に出ている者は皆急いで帰宅し，子どもを家に入れる。強い呪力を持ち，日中や夜は不死身なバリの伝説中の巨人シウルクが，不死身でなくなり，殺されるのも，魔力あふれる黄昏時だという（吉田，1976）。

マレー地方でも，夕暮れ時は，あらゆる種類の悪霊が一番威力をふるう時であると信じられており，子どもたちを家に呼びもどし，女性たちは悪霊払いのために，悪霊が嫌う悪臭を放つ木の根を噛む。またマレー地方では宗教儀礼も，アラビア人やヘブライ人と同様夕暮れ時に始まる（吉田，1976）。

4. 季節の境界線とお化け

幽霊の出る季節といえば夏だが，阿部正路はそれは夏が，種子を播く春，収穫する秋の中間にあたり，中じきりの季節だからだという。

日本でも，季候の境界には，浮動する邪霊があって，村人の生活を脅かし，疫病をはやらせ，農作物を荒らすものと恐れていたが，バリ島南東のヌサープユダ島でも，大きい牙を意味するラトウーグデームチャリンという長い牙をはやした怪神がやってきて，疫病や災いわざわいをふりまくのは，バリ暦で乾期の終わるカリマ（五月の意）と雨季の初めのカナム（六月の意）ころだとされる（吉田，1976）。

5. 年の境界線

年と年の境界線にまたがる年末年始にも種々のタブーがある。大晦日には門松用の松を刈りに行くことは縁起が悪いといわれたし，江戸では大晦日の夜は死者の霊がやってくる，川で死んだ人たちの霊が水から上がってくるので，船を出すことはタブーとされ，頼まれて船を出した深川の回船問屋徳蔵が，海坊主に会い撃退したものの，女房が死んでしまっていた，などという話が伝わる（田中，1999）。

元日もまた掃除をしてはいけない，掃除をすると福が逃げる，お金を使ってはいけないと言われた。

さらに年内を分かつ境界線であるお盆にも，泳ぐと死ぬ，などという地方もあり，いずれにしろ，時間を分類した境界線は，多くの怪異，タブーに覆われている，というわけである。

Ⅲ．境界的時間から力をもらう

1. 黄昏時に異界の声を聞く

人の思うに任せない人の世の行く末を，超自然的力に接触することで占うのは，夕占（ゆうけ）と言われるように，昼夜の境界的時間としての黄昏時である。

たとえば東大阪市の瓢箪山稲荷神社は辻占で知られる。瓢箪山には東高野街道が通っており，この街道に面した「巫女の辻」に，石の「占場」があり，この辻に立って，最初に通った人の語った言葉や姿，性別，年齢，持ち物，連れの有無などを，瓢箪山稲荷の宮司に報告し，託宣を受けるのであるが，その時間は黄昏時なのである。

これは，夕暮れが，人が活動する時間帯と，神や妖怪が活動する時間帯の境界線であるため，神や妖怪の世界，異界とのコミュニケーションが可能で，人間の将来をつかさどっている異界の神か

ら将来に関するメッセージを受け取る，といった特別なことが可能となると考えられたためである。

2. 季節，年の境界線にやってくる神の力

バリ島南東ヌサープユダ島で疫病や災いをふりまく大牙神ラトウーグデームチャリンは，人助けもする善神の性格も持つ神とされ，その像は口寄せ，占い，病気治療などを行なう巫女の祀る社の中などにおかれているが，出現するのは，乾季から雨季に移行する境界線に当たる10月から12月である（吉田，1976）。

日本では，一年で最初に雷が鳴った時に，節分の豆を食べると難を逃れると言われるが，そもそも呪力があるとされる豆まきが行われる節分もまた，春の始まりという境界的時間である。

かつて中国で年と年の境界線とされていた冬至には，日本でもカボチャを食べると長生きするなどと言われるが，いずれにしろ，境界的時間とは，特別な力が発生し，それを得ることが可能な特別な時とされている，というわけである。

第二章　空間と変

Ⅰ．空間的境界と変

1. 内外の境界線と変

日本人なら，住宅に入るときには当然土足は脱ぎ，出るときには靴を履く。街を裸足で歩いたら，変な人だ。土足で入ったら家に土が入ってしまうし，裸足で外を歩いたら怪我をするから，これは当たり前と思える。しかし，たとえまったく汚れていない新品でも，靴を履いて家の中を歩くのは変とされ，実際歩いてみても居心地が悪く感じてしまう。逆にどんなに掃き清められ磨かれた庭でも，裸足で出たら変で，本人も汚く感じてしまう。

同様に，室内に帽子をかぶったまま，コートを着たまま入るのも変だ。これも実際に邪魔になるわけではないし，寒ければ着たままでもよさそうなものだが，変な行動とされる。

2. 空間の機能分類と変

通勤電車の中での化粧，飲食が，しばしば変な，みっともない，恥ずかしい行為と白眼視されるが，1996年には台湾人カップルがトイレで結婚式を挙げ，台湾はもとより，日本でも変なカップルとしてニュースになっている（NHK, 1996）。さすがにメディアは取り上げないにしても，隠れたファンも多そうなトイレで読書，などというのも，かなり変な目で見られる。

香港では浴室がなく，便器の真上にシャワーがついているという家も結構多いが，日本人の目にはとても変な空間に見える。実際日本では，トイレと風呂が一緒のユニットバスも変とされ不人気だ。これは，風呂とトイレはともに身体の汚れを落とすという同じ機能の空間とされている文化では変ではないが，便所は排泄という汚れを落とす空間であるのに対し，風呂は加えてくつろぎの場ともされる日本人には，空間の機能分類の境界線を犯した，変な空間とされる，というわけである。

要するに内と外，風呂とトイレといった境界線が設定されており，家の中は内で，土足不可，きれいに保ち，床に直接座り，布団を敷いて寝る，トイレは排泄をすべき，といったことが決められているわけで，こうして設定された内と外，機能を分類する境界線を曖昧にするような行動が，変とされているというわけである。

Ⅱ．境界的空間の魔性とタブー

1. 内外の境界線とタブー

屋敷や寺社の内外を隔てる門では，敷居を踏んではいけないし，建物の入口の戸の敷居も同様だ。家の中でも部屋の内外を隔てる敷居や畳のヘリを踏んではいけない。また家への出入りの際も，縁側から家に上がってはいけないとされる。畳の上で履物を履いて外に出てもいけない。

さらには家の中に井戸（内井戸）があると病が絶えないという地方もあり，普通外にあるものが内にあるという，内外の境界線を曖昧にするものがタブーとされているのである。

2. 上下の境界線とタブー

日本では，枕の上に座ったり，食卓に乗ったりしても怒られたし，飯櫃に座るなどとんでもない

ことだった。これは無論食べ物を大事にさせるためではあるが，さらには，空間的上下の境界線を侵すことを禁じるものでもある。

ハワイの原住民族でも，食物の容器を，歩いたり，腰をかけたりした物で覆ってはならないとされるし，枕の上に座ったり，足をかけたりしてもいけない。そんな人々にとって，寝る時に同じシーツを上にかけたり下に敷いたりする白人は，上に属すものは上におき，下に属すものは下にしておくべきだということを知らない変な人々と映った。彼らにとって，上下の境界線を侵すのは，会葬者が喪のしるしとして，腰巻を首に巻きつける酋長の葬式の時だけなのである（吉田，1976）。

3. 地面との境界線とタブー

1990 年代，地べたに直接座り込む「ジベタリアン」が流行したが，汚らしい，だらしがない変な若者たちと白眼視され，やがて直接地べたにではなく，段のあるところを選ぶダンサリアンへと変わり，やがて消えてしまった。

ヤップ島では酋長のものは肩より下で運んではいけないとされているが，他にも酋長はおんぶされて移動しなければならず，決して足を地面につけてはいけない，などという民族もある。現在日本でも，多くの企業で社長室は上階，最上階にある。社長室を地下になどというのは，ほとんどありえないことだろう。

日本の文化では，人が座るべきは椅子や畳の上であり，地面には座るべきでないとされる。海水浴，ハイキングなどでどうしても地面に座る場合も敷物を敷くべきで，1 センチの草履，新聞紙 1 枚でも，地面から高さを隔てるべきなのだ。これは地面と地面から離れた空間が別々の分類で，異なった評価をあたえられ，どういう行動をするべきか，するべきでないかも決められているからだ。土，地面とは動物，植物の空間で，ごみ，排水などを捨てる汚れた空間とされ，地べたに直接触れることはタブーとされてきている。

4. 境界的空間の魔性

空間的な境界性の神秘性・魔性は，村と外との境目や，分れ道，四つ辻ないし十字路にしばしば結びついている。たとえば，憑きものの動物が現れやすいとされるのは，三つ辻とか四つ辻とされるし，通り魔に遭うのも，四つ辻，橋のたもと，橋の上，交差点といった境界線の近くが多いという。

中でも怪異がもっとも起こるのが橋であり，江戸の七不思議も水辺，とりわけ橋に多い（宮田，1988）。本所七不思議にはよく知られた「おいてけ堀」の他に，駒留橋（墨田区）の下を流れる隅田川入堀の，葉が一方だけしか生えない「片葉の葦」があるし，千住七不思議にも「千住大橋と大亀」，「千住大橋の大緋鯉」，八丁堀七不思議にも「地獄の中の地蔵橋」がある。

神田川の新宿，中野区境に架かる淀橋は，中野長者が財産を密かに埋めさせた下男を，帰路に秘密が漏れないよう川に投げ込んだ場所で，その祟りによって娘が蛇と化したという。姿が見えなくなったので姿見ずの橋，面影橋と呼ばれ，嫁入り行列は渡らない不吉な橋とされた。後に徳川家光が，不吉な橋の名を大阪の淀川にちなんで変えさせたと言われ，1913（大正 2）年の浄橋祭の後ようやく，この橋を嫁入り行列が渡れるようになったという（田中，1999）。

千川用水の九頭龍橋（練馬区）は，嫁が里帰りの帰路に渡ろうとしたところ橋がなかった。まもなくその嫁は死んだが，以後も渡った人が死んだり狂ったりした。これは太田道灌の命を狙ったが果たせなかった渡辺氏が龍神になり祟ったためといわれ，弁天を勧請すると収まったが，結婚，祝儀の時は近年まで渡らなかったという（田中，1999）。

現代は魔物こそあまり出なくなったものの，外部とつながる境界的な場所である鉄道の駅や空港なども，何か特別な趣をもった場所だと感じられ，映画やドラマの舞台として独特の雰囲気を醸し出したりする。

Ⅲ．境界的空間で力をもらう

1. 山の辺，水の辺，道で異界の声を聞く

寺社は神仏に祈り，神仏の声を聞く場であるが，

その立地は，多くが山の辺，水の辺，といった地形的に境界的な空間である。

瓢箪山稲荷神社の辻占も，東高野街道に面した巫女の辻で異界の声を聞くというものだが，人が作り上げた空間を外部へ，そして自然の支配する空間へと結ぶ境界的な空間である道は，チ（霊）という霊的なものが飛び交う危険な空間であり，霊の言葉を聞くことができるとされ，道祖神や辻の神などが置かれたりしている。

バリ島でも祭儀の際に悪鬼への供え物をする場所は十字路であり，境界的空間である道は，鬼とのコミュニケーションが可能となる空間とされているのである。

2. 橋で異界の声を聞く

橋占とは，二つの空間を結び隔てる境界線である橋の袂に立って，往来する人の言葉を聞き，それによって自分の願い事や気に掛かることの吉凶，成否を判断したりする占いである。

橋占の名所は，他界から霊魂を戻した橋とされる平安京一条戻橋で，陰陽師安倍晴明が橋の下に置いた式神を用いて橋占を行い，『源平盛衰記』（巻十，中宮御産事）にも，「一条堀河戻橋にて橋より東の爪に車を立てさせ給ひて，橋占をぞ問ひ給ふ」とあり，安徳天皇が生まれる際に，二位殿が戻橋で橋占を行い，天皇の将来を 12 人の童が走りながら唱えた言葉で占った記事がある（中村，2005）。

神田川の面影橋（新宿区，豊島区），先述の姿見の橋（淀橋）も，姿見の池，姿見の井戸などと同様に，水に影を映して，その影によって占いを行った橋であるともいわれる。

また，「名にしおはば　いざ言問はむ　都鳥わが思ふ人は　ありやなしやと」（古今集）で知られるように，在原業平が都に残した妻が元気かどうかを都鳥に言問わんとしたのも隅田川の言問橋（台東区，墨田区）辺りである。

3. 橋で迷子を捜す

赤ちゃんの人生の安全を祈願し，あの世からやってきた赤ちゃんをしっかりとこの世の存在にするための儀式である橋参りでは，赤ちゃんに橋の上を渡らせるが，子どもが迷子になった場合，その行方を教えてもらうのも橋である。

一石橋（中央区）には，「満よい子（迷子）の志るべ」という石柱が残されているが，これは迷子になった子どもを捜すために 1857（安政 4）年に立てられた迷子しるべ石で，柱の右側面は「志らする方」，左側面は「たづぬる方」とされ，情報提供を求めた。迷子しるべ石は 1842（天保 13）年の湯島天神（文京区）開帳の混雑に際して，奇縁求人石として企画されたのが始まりで，一石橋，浅草寺にも立てられた。明治初年には一石橋，赤羽橋（港区），湯島天神前，浅草仲見世前（台東区）に，さらに両国橋，神田万世橋際（千代田区），芝大明神（港区）にも立てられていた。

これは無論迷子捜しのための掲示板，伝言板ではあるが，迷子は神隠しといわれるように，異界との関係が深いが，その情報を得ることができる特別な力のある場とされたのは，異界との境界線としての橋なのである。

4. 橋尽くし

三島由紀夫の『橋尽くし』（三島，1996）は，花街の 4 人の女性達が陰暦 8 月 15 日の夜に，築地（中央区）の 7 つの橋を渡り切るまで口をきかない，話し掛けられてもいけない，同じ道を 2 度歩かないという約束で街を歩いた成り行きを描いた小説である。7 つの橋を無事に渡り終えれば，願掛けが叶うとされており，橋は人の世ではどうにもならない，特別な力を与えてもらえる場とされている。

橋はこの世の境界で，他界，冥界という見えざる世界が露頭する。それゆえ橋は，人知を越えたことが起こる場所，未来の出来事を見ることを可能にする場所，異界からの託宣を聞ける場所などとされてきた，というわけである。

5. 水辺，橋で力をもらう

江戸の町では，陸上交通と水上交通の結節点となる橋とたもとの橋詰広場は，最も人で混雑する場所の一つとなり，市が立ち，旅芸人が大道芸を

演じ，茶屋が並んだりして，とりわけ両国橋は江戸最大の歓楽街となっていた。人々はこの境界的空間で遊ぶことにより，ストレスを解消し，ふたたび生活する力を得ることができたのである（陣内，1993）。

大山詣も，両国橋で水垢離をして大山へ向かうことにより，生命力を盛んにすると考えられていたように，両国橋は，川向こうの他界である向島とこの世とを結ぶ境界線である。この境界線を通って他界へと接近することによって，現世の人々を活性化し，蘇生させる力が得られると考えられたのである（栗本，1983）。

6. 境界を越えてきたものから力をもらう

浅草観音を初め，本尊が海から引き揚げられた，海岸に漂着した，という言い伝えは多く，補蛇落山海晏寺（品川区）の本尊のように品川沖に現れた鮫の体内から出現したなどという例もある。

ウミガメは占いに用いられ，流木も神聖視されたりもする。逆に江戸の海に大群が出現した鯰は地震を起こすと信じられていたし，現代でも，海の向こうから来襲したゴジラは品川宿そばの八ツ山橋付近に上陸し，東京を破壊する。

禍福いずれにしろ，水，海の彼方からやってくるものが境界的空間で霊力を発揮する（宮田，1996）とされているわけで，水辺という境界的空間は，その彼方からもたらされる超自然の力に触れ，力を得ることを可能にする特殊な場と考えられてきた，というわけである。

第三章　変な人

Ⅰ．社会的境界と変

1. 社会的役割の境界線と変

新宿の街をタイガーマスクの面，マントをなびかせ，花束を持った度ハデな格好で音楽を流しながら自転車で疾走する新宿タイガーと呼ばれる名物おじさんがいる。「少年少女に夢と希望と愛情を」をテーマに，自らの使命は世の中をパァーッと明るくすることだと，30 年以上もこのスタイルで走り続けているのだが，実は朝日新聞販売店の配達員である。もしこの人物が，ジャンパーにジーンズ，普通の自転車で静かに新聞配達をしていれば，何も変ではない。新聞配達員でありながら，コメディアンのような扮装で，新聞配達員という職業に期待されていない「世の中をパァーッと明るくすること」を使命として疾走しているから変なのだ。

同様に，副業に風俗店を営む僧侶とか，昼は教員，夜はホスト，などという人が現れれば，世間は変な人という烙印を押そうとする。

2. 大人と子どもの境界線と変

子どもが大人のような口のきき方，態度をしたり，大人のような服装，化粧などをすれば変だ。銀行の窓口に行って係員が子どもだったら，いくら業務をちゃんとこなせても，すごく変だ。深夜の街を歩いていたり，たばこを吸い，酒を飲んでとなれば，変を通り越して非行とされる。

逆に大人が子どもの遊びをしたり，子どものような口のきき方だったりしたら変だし，かつては，大人が少年マンガ雑誌を読むことも奇異の目で見られていた。

多くの社会で，子どもの言葉，髪型，服装，そして飲酒，喫煙といった行動，外出できる時間，寝る時間，行動圏などが決められ，統制されており，この境界線を犯す行動が変とされているのである。

3. 男と女の境界線と変

男言葉で話す女子中高生は多いが，これに対して世間は変というレッテルを貼り，女の子のくせに，女の子なのだから，と女の子らしい言葉を使うよう強制する。男子中高生が女言葉で話したら，もっと変で，気持ち悪いなどとされてしまう。

その他，気質からしぐさ，服装，髪型，持ち物まで，男らしいもの，女らしいもの，が決められており，これを逸脱した場合に変というレッテルが貼られるのであり，男と女の境界線を曖昧にすることが変とされていることがわかる。

Ⅱ．変な人のタブーと差別

1．男女の行動のタブー

テソの文化では，女性が男性と同じ吸い方でたばこを吸うことはタブーとされる。つまり男性は日本人同様に吸うが，女性は火口の方を唇にくわえてタバコを吸わねばならず，反対向きにくわえることはタブーとされる（吉田，1976）。

またアフリカのカンバ族のように，焼いたり炙ったりする調理法は男性的とされ，煮る料理は女性的とされており，獲物を焼く調理は男性が家の外で，煮ものは女性が家の内で行われねばならない，などという民族もある（吉田，1976）。

2．異性装

日本でも，男装の麗人はともかく，女装の男性となると，かなりの差別の対象となるし，オカマも同様に気持ちが悪いなどと差別されるが，逆に，祭り，花見といった特殊な，非日常的時間においては，敢えて異性装がおこなわれる例もある。

Ⅲ．変な人から力をもらう

1．第三の性の力

アメリカの平原インディアン諸族には，女装するシャーマン「ベルダーシュ」がいた。ベルダーシュは神からの夢告を受けた男性たちで，去勢するわけではなく，日常生活でも髪を伸ばし，女装し，女性の役割とされる仕事をして暮らすことが社会的に認められていた。さらには呪医や呪術師の役割を果たす者もいたし，部族の会議で彼らの助言が不可欠，というほど高い地位にあった。現在もわずかに残る彼？らは，シャーマン，呪医，名づけ親，老人，子どもの世話役，助言者として尊敬されている（斗鬼，2007）。

数万から数十万いるといわれるインドの「ヒジュラ」も，女装し，髪を伸ばし，アクセサリーを身につけ，入念な化粧を施している第三の性だが，彼？らはシヴァ神や母なる女神と同一化した存在として，誕生，結婚などの儀礼で，歌舞音曲による祝福を与える聖なる芸能者という重要な役割を与えられている（斗鬼，2007）。

こうした性別の境界線を曖昧にする人々は，一方で差別と偏見の目で見られ，恐れられ，他方で，特別な力を持ち，人々を助けてくれると考えられているのである。

2．女性化，両性具有化による呪力の強化

インドネシア・カリマンタンのンガジュ・ダヤク族では巫師が女装するが，セレベス（セラウェン）島のブギ族では，儀礼のさいに女装する男性司祭は，完全に女性になるのでなく，半ば女性半ば男性の装いをする。すなわち，儀礼の際にサロン（腰巻）と女性の上着をまとい，女性用装身具をつけるが，同時にグリス（短剣）と男性用頭巾をつけ，両性的性格をそなえる（吉田，1976）。そうした意図的境界線曖昧化によって呪力を強化できるとされたのである。

3．よそ者の力

子どもが言うことを聞かないと，移動する芸能者であるサーカスに連れていかれると今日でも言うが，四国では，言うことを聞かないと遍路に連れていかせると子どもたちをしつける。

遍路はこのように恐れられる存在ではあるが，他方で，持っている集印帳を貸してもらい，体の悪い所に当てると良くなると言われるし，遍路にお接待をすることによって，功徳を積むことができるともされている。共同体の境界線を越えて行き来する人々には特別な力があるとされているわけである。

4．酔っ払いの力

アステカ族は酔うという状態を，神や霊魂がもたらすものと考えたから，酔うことは神の思し召しと考えられ，ビールに酔った人は社会的にも個人的にも，いかなる束縛も受けなかった。またオメトクトリ，センデホ（ビールに酔った人）を事故死から守るテクェクメカウイアニ，酔っ払いに刑罰を与えるテートラヒュイアニ，二日酔いの神クァトラパンキ，パパスタックなど，多くのビール神もいた。

その人の社会的地位，立場などの境界線を逸脱

し，意識と無意識，正気と狂気の境界線をさまよっている酒に酔った人は，神と人とのコミュニケーションを深め，神に近寄ることができる力を持つと考えられていたのであり，それゆえ，日本でも，神事には必ず神饌として酒が供えられ，酒造りが敬虔な神事とされてきた，というわけである。

第四章　自然というカオスの排除

Ⅰ．自然の時というカオスと境界線

1. 自然の時というカオス

自然界の時とは，無限に流れ続けるもので，1999年も2000年も，月曜も火曜も，9時も23時も存在しない。まして今日が大晦日，明日が正月などという境界線などあるはずがない。

さらに自然界では，確かに明るい時と暗い時，暑い時と寒い時といった違う時はあるものの，ある瞬間に昼間と夜，春と夏が切り替わるわけではない。

つまり自然のままでは，時は無限に流れるアナログな存在で，明確な境界線によって分類されているわけではないのである。

しかしながら人間は，無限に続く，何の分類もない時の中で生きていくことはできない。いつ何をするべきかが決められていないと，人はどう生活していったらよいのかがわからない，あるいはいちいち考え，決めていかなければならないことになる。

すなわち人は，自然のままの，カオスの時の中では生きていくことができない。そこで人は，無限の時の流れに，朝，夜，日，週，月，季節，年，世紀などといった分類を作り出し，それぞれ，何をすべき時，してはいけない時，などと決め，その枠組みの中で生活している，というわけである。

2. カオスの排除と境界線

それゆえ，自然の時というカオスを排除し，分類を設定することによって作り上げた時間の境界線を壊したり，曖昧化する行動，もの，人などは，きわめて危険なものとなるわけで，こうした境界線曖昧化要因を排除することこそが，人々が安定した社会，文化，そして生活を営んでいく上できわめて重要となる。そこにおいて，変の意味を考える時，変というレッテルを用意し，それを貼り付けることは，まさにこうした時間の境界線を破壊する行動を，ものを，人を排除することを可能にしているわけで，変は社会，文化，生活を維持していく上で重要な仕掛け，と考えることができるのである。

Ⅱ．自然の空間というカオスと境界線

1. 自然の空間というカオス

自然のままの宇宙に上下右左など存在しないように，物理的空間には本来それ自体に上と下，右と左などという分類は存在しないし，内と外を隔てる境界線も存在しない。まして，あちらが川崎で，こちらが東京，東京の中でもここは蒲田，そちらは大森，などという分類も，その間を隔てる都県境，区境，丁目境などというものが存在するわけがないし，街の中でもどこが公園で，どこが病院か，教室ならどこが教壇，どこが学生席か，などという境界線は何も決められていない。

しかしそうした自然のままの空間は，いわばカオスの空間であり，その中では，人はある行動をどこでするべきか，それ以前にどこに自分の身体を所在させるべきかさえ分からない。人はカオスの空間の中で生きていくことはできないのである。

だから人は，街の中でも，家の中でも，空間は道路，ホーム，病院，居間，寝室，トイレなどと分類し，歩く，食べる，休む，排泄するといった，さまざまな行動が行われるべき場所がどこかを決めている。人はそれを学習し，その通りにしている限り，迷うこと無く座席に付け，問題無く講義，営業ができ，歩いたり休んだりすることができるという仕組みである。

2. 空間の境界線を曖昧化する行為の排除

トイレでの結婚式や祭壇でのウンチといった行動は，こうしてせっかく設定された内外，上下，祭壇とトイレといった空間の境界線を曖昧化，破壊する行動であり，まさに人々自身が行動することを，円滑に生活することを，不可能にしてしま

う許されざる行為である。

したがってそうした行動を排除するために作り出されたのが，変というレッテルである。トイレで読書，などというさほど危険でもないことでも危険は危険であり，少し変とされるなど，その危険性に応じたレッテルが境界線の曖昧化を防止する仕掛けとして使用されるというわけである。

Ⅲ．自然の人というカオスと境界線

1．自然のままの男と女，大人と子どもというカオス

人の性別など特に意識しなくてもわかる，などと思いがちだが，実は顔の一部を隠してみただけでもわからなくなる場合も多い。声もわからない場合が多いが，体を見ればわかるというのも，必ずしも当てにはならない。体型は個人差が大きいし，男でも胸が大きな人はいる。年をとるにつれて男女とも老人の体形になってくる。性器にしても，実際には両性具有の人もいる。つまり心理的にはもちろん生物学的にも，自然のままでは，男と女の境界線はさほど明確ではないのである。

同様に，人の身体は生まれた瞬間から死ぬまで，連続的に変化する。20 歳の誕生日に突然ヒゲが生えたり，60 歳の誕生日に突然皺だらけになったりするわけではない。大人と子どもの境界線も自然のままでは明確ではない。まして，誰が社長で誰がヒラか，などという境界線は，当然のこと自然のままに存在するはずがない。

2．男女，大人と子どもの境界線の必要性

しかし私たちの社会は，誰が男，誰が女かが明確になって，初めて成り立つ。電車内で，隣に立っている人が同性か異性かによって，どの程度接触してもよいか，どの部分が接触してもかまわないかを変えなければいけない。そもそも，配偶者選びに際して，相手が異性であることが確認できないと，誰にアタックするべきかわからないし，せっかくアタックしてもあとから実は同性だったとわかる，といったことでは，生物として存続していく上で大変に効率が悪い。

つまり自然のままでは必ずしも明確でない男と女の境界線を，明確化する必要がある。それが男女別に定められた髪型，服，化粧，言葉，名前，身のこなしなどといった仕掛けなのだ。

さらに私達の社会は，大人と子ども，老人といった年齢や世代などを，人を分類する基準として利用しているから，それらを明確にする仕掛けが必要である。実際生物学的には，ある日突然子どもが大人になるわけではないから，大人と子どもを明確化するために，服，髪型，言葉などを区別するようにするのである。

また地位，職業などを割り当てられたなら，それを明確にする必要があるから，社会的役割に応じて，服装，髪型，持ち物，振る舞いなどが決定されている，というわけである。

3．変な人という排除のレッテル

こうしてせっかく設定した男女，大人と子ども，社長とヒラといった分類の境界線を曖昧化することは，社会が円滑に動いていくことを不可能にしてしまう。それゆえ，新聞配達人なのか芸人なのかわからない，大人なのか子どもなのかわからない，といった境界線上にある人々にたいして，変な人というレッテルを貼って排除することで，文化によって作り上げられた社会という仕組みを守ることが可能になる，というわけなのである。

おわりに

Ⅰ．

ニューギニアのバルヤ族の宇宙開闢神話によれば，元始，太陽と月は大地と混ざりあい，一切は灰色に包まれ，あらゆる動植物が同じ言葉で話し合っていた。人間も霊も動植物も一緒に生きており，人間は，現在の人間と同じではなく，男のペニスには孔があいていなかったし，女のワギナは開いていなかった。犬もまた性器が塞がれていたという。

ついで，太陽と月がやおら立ちあがり，自分たちの上に天空をおしあげた。この時から，昼と夜，雨期と乾期がこもごも交代するようになり，動物たちは人間と離れて森に入り，霊は深いところに

去って身を隠し，人を脅かすようになった，とされている（山内，2005）。

要するに，こうした創世神話は，自然のままのカオスから様々な境界線が設定され，秩序あるコスモスが作られたことを強調しているのである。

『日本書紀』でも同様に，元始は「昔天地がいまだ分かれず，陰陽の対立もまだ生じなかった」。ところがそうした，「混沌として鶏卵のように形が定まらず，ほの暗い中に，まずものの兆が現われた。その明るく清いものは高く昇って天となり，重く濁ったものは凝って地になった」（山内，2005）という。

こうした東洋における天地の境界線設定は，自然発生的で，人為的ではないが，ヨーロッパの場合は，『旧約・創世記』に，原初「地は形なく，むなしく，闇が淵のおもてにある」カオスだったが，創造神ヤハウェが「光あれ」というと光と闇が生じ，以後六日間にわたって，陸と海，太陽と月，昼と夜，男と女，動物と植物という対立項を次々に創りだしたとされており，神が自分の意志で言葉によってコスモスを作りだしたとされている。

民族によって若干異なったとらえ方をされてはいるものの，世界というコスモスは，あたかも細胞分裂のように分割，すなわち境界線の設定により増殖させてゆくというやりかたで創造された，という点で類似しているのである（山内，2005）。

Ⅱ.

こうした創世神話に始まるあらゆる分類は，人のすべての行動，思考の基礎である。人は動く動物であり，たとえばすべての行動の舞台となる空間が，分類され，そこでするべき，するべきでない行動が決められていなければ，いちいち考え，決めなければならず，行動しようがなくなってしまう。これは空間だけでなく，時，動物，植物，事象，そして人々自身に関しても同様である。

それゆえ，人は境界線を設定して分類を作り出し，それによって，いつ，どこで，誰と，どうすべきか，といったことを決める仕掛け，すなわち文化を作り出しているのである。

こうして混沌の自然，つまりカオスは，秩序あるコスモスへと作り変えられ，社会を形作り，日々当たり前に生活していくことが可能になっているのである。

こうして作りだされたコスモスを，カオスへと引き戻してしまうような危険を排除するという重要な機能を与えられた仕掛けこそが，変というレッテル，というわけである。

Ⅲ.

こうして人は，自然というカオスを自ら統制し，作り出し，変という仕掛けによって維持していくコスモスの中で，社会を形作り，安定した生活を維持していくことを可能にしているのだが，そこで注目しなければならないのが，実はそうした人々自身もまた，本来自然のカオスの一部だ，という点である。

たしかに自然というカオスに立ち向かい，作り出したコスモスこそが，人々が生きていくことを可能にする。しかし他方で，こうしたコスモスの中では，本来自らが自然の一部である人々自身が窒息し，生命力を衰えさせていくことになる。

実際人は，生命力を復活させるために，自然に触れるし，歓楽街は水辺に作られる。さらにはその歓楽街が，他界と接する寺社門前に作られるように，他界，異界という超自然のカオスもまた，人々が生命力を取り込み，復活させることを可能にするものとして利用されている。

ネグリートは，人が鳥や昆虫の鳴き声に応えることも，人に似ているが人ではない猿に話しかけることも，タブーとしているという。言葉というものは人との間でのみ交わすべきだというのである（吉田，1976）。人とは，自らが動物であることを否定し，自然を嫌悪する動物なのである。

たしかに人は，自然のまま，自然の只中では生きていけない。しかし，本来動物である人は，他方で，文化によって自然を排除，統制しつくしたコスモスの中でもまた生きていけない。このように，一方で自然を嫌悪し，対抗し，しかし他方で自然にすがるという生き方をする他ない人という動物は，まさにあらゆる動物の中でもっとも変な

動物である，といえるだろう。

参考文献

井上　靖，1974,『幼き日のこと』，毎日新聞社
陣内秀信，1993,『水の東京』ビジュアルブック江戸東京(5)，岩波書店
栗本慎一郎，1983,『都市は，発狂する　そして，ヒトはどこに行くのか』，光文社
三島由紀夫，1996,『憂国・橋尽くし』，新潮社
宮田　登，1988,『異界が覗く市街図』，小松和彦編，青弓社
宮田　登，1996,『歴史と民俗のあいだ』，吉川弘文館
中村　晃，2005,『完訳源平盛衰記』2（巻十，中宮御産事），勉誠出版
NHK, 1996,『NHK ニュース』1 月 15 日，NHK
田中　聡，1999,『伝説探訪東京妖怪地図』，荒俣宏監修，祥伝社
斗鬼正一，2005,「くぅ～ちゃんを食っちゃうなんて」，『本の話』2005 年 5 月号，文芸春秋社
斗鬼正一，2007,『こっそり教える世界の非常識 184』，講談社
山内　昶，2005,『ヒトはなぜペットを食べないか』，文芸春秋社
柳田国男，1977,『妖怪談義』，講談社
吉田禎吾，1976,『魔性の文化誌』，研究社